



アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ



霞ヶ浦のサンセット

—アリス・ギア・アイギス外伝—

第六話 「迷い」

《……わかりません》

◆映画研究部部室

優陽 「……わかりません。あたし、本当にアクトレスが好きなのか、最近、

自信がなくなっているんです……」

優陽は視線を落とす。

そんな優陽を見ても、松井は厳しい口調を崩さない。

松井 「そうだろうな。この脚本からは迷いみたいなものを感じる。稲葉らし

くないんだ」

優陽 「あたしらしくない、ですか？」

松井 「こうして一緒に演技をしていると、稲葉がいかに真っ直ぐで明るい性格なのかがわかる。だけど、この脚本は真逆だ。目標が見つからず、迷宮を彷徨っているかのようなだ」

優陽 「……………」

優陽の目は僅かながら濡れていた。

そんなことは分かっているとばかりに。

このまま追求は続くかに見えたが、意外にも松井は破顔した。

松井

「だが、よく勇気を出して認めたな。アクトレスに対する迷いを」

優陽

「勇気、なんてあたしにはありません。ただ、混乱しているだけです……」

松井の言葉も、今の優陽には届かなかった。

松井

「……フム」

松井は顎に手を当て、何かを思いついたように呟いた。

すると動画チェックをしている滯音の方へ振り向き、彼女に聞こえるように少し大きな声で話しかけた。

松井 「草野。今日はもう撮影は終わりか？」

澤音 「あ、はい。このチェックが問題なければ、終わりにしようと思っています」

松井 「なら、ちょっと稲葉を借りていくぞ！」

優陽 「え……？」

松井 「稲葉、付いてこい！」

松井は白い歯をキラリと輝かせながら、親指を立ててクイツと外に向けた。

◆屋上

松井は普段は解放されていない屋上の扉を開け、優陽に出るように促

した。

そして周りを囲っている柵の間際まで移動すると、沈みかけている太陽を指さした。

松井 「稲葉、見てみる？ あれはなんだ？」

優陽 「えっと、夕陽、ですか？」

松井 「その通りだ。だけど今の時間が分からず、方角も見当が付かなければ朝陽と間違えるヤツもいるだろう」

優陽 「えっと、はい」

松井が時々突拍子もないことを言うことは、校内でも有名だった。

正に今、それを証明するような言動に直面して、さすがの優陽も戸惑っていた。

松井 「俺が脚本に感じている違和感はこんなイメージだ。夕陽は見方によっ

ては朝陽にも見える。いや、そもそもどこかの国だと時差があって朝陽になるんだろう」

優陽

「……そうですね」

優陽

（実際はシャードの太陽光ライトだけど……）

一体、何が言いたいのだろうか？

そもそもこの例え話は的を射ているのだろうか？

そんな不安を抱えながら、優陽は松井の話を聞いていた。

松井

「つまり、今の脚本も間違っているんだ。アクトレスだって我々には正義の味方だが、ヴァイスからすれば残虐者かもしれん」

優陽

「……メチャクチャです」

松井

「だがそうだろう。アクトレスだって見方を変えれば違うものとして定義される。物語を作るとするのはこうした多角的な視点が本来必要なんだ」

優陽 「多角的な視点……」

ようやく核心に迫ってきたことで、二人の間に緊張感が走り始めた。

松井 「そうだ。稲葉はアクトレスが好きなのかどうかわからなくて迷っている。だが、それはうまくやれば多角的な視点にもなり得る」

優陽 「迷いが多角的な視点になる……?」

松井 「それでも迷ったままでは宜しくない。それでは観ている人に何も届かないからな。間違っていたっていい。それは学生の特権だ。だけど、ポリシーは持て。アクトレスが好きなのか、好きじゃないのか。どちらでも良いから、辿り付いたら突き通せ！」

松井特有の熱さが漲っていた。

普段は生徒にうざがられているその熱さも、今の冷え切っていた優陽には救いに他ならなかった。

優陽 「……あたし、答えを見つけること、できると思いますか？」

松井 「できる！」

優陽 「断言してくれるんですね」

松井 「稲葉は迷っていたからな」

優陽 「え……？」

松井 「答えを見つげるためには、そもそも迷わなければならぬ。迷わなければ答えなんか必要ないだろ？」

優陽 「あはは！ 確かにそうですね」

松井 「大丈夫。稲葉にはあの夕陽が見えている。あとは朝陽にしようが夕陽のままにするかは稲葉の自由だ！ アクトレスが好きか嫌いか、それは稲葉の自由なんだ！」

優陽 「……………」

松井 「あとは見つげるだけだよ。期待してるぞ、稲葉！」

優陽 「……はい」

松井の言うことは理解できた。

だけど、元気に返事するだけの割り切りは、今の優陽にはまだ難しかった。

◆校庭

滯音

「あ、優陽〜!」

校舎から出てきた優陽に手を振る滯音。

優陽

「あ、滯音ちゃん! しべちゃん!」

校門で待っていた二人に気がつき、手を振り返す優陽。
そしてテテテと二人に向かって走って行く。

調

「松井先生に絞られたのか？」

優陽

「絞られたというか……相談にのってもらった」

漣音

「そうだったんだ！ 脚本に文句付けられているのになって、ドキドキしてたよ」

優陽

「あはは」

辺りはもう大分暗くなっていた。

それなのに、当たり前のように帰りを待ってくれて、側にいて欲しい時にいてくれる親友達に、優陽は感謝の気持ちで一杯だった。

◆ 帰宅路

漣音

「……ねえ、優陽。明日の休み、海行かない？」

調 「あ、そういや、明日は海開きの日か」

もういくつ寝ると夏休み。

夕方になっても暖かい時期になっていた。

滯音 「うん！ 明日はいい天気らしいし、日が経てば経つほど、受験のこと

を考えなくちゃいけなくなるからさ」

調 「確かに。どうする、優陽？」

二人が自分に気をつかってくれていることは、優陽にも痛いほどわかって
いた。

でもその言葉に乗っかり、気分転換に行くのもいいと思った。

優陽 「そうだね。うん。行こう、海！」

滯音 「それじゃ、明日の朝、優陽の家に自転車で集合ね、しべー！」

調 「ああ、了解」

優陽 「あ、水着、買ってない！」

調 「フフン。私はこの前の休みに購入済みだ」

滯音 「実はわたしも買ってあったりするんだよね」

優陽 「二人ともずるいー！」

調 「優陽は去年とサイズもそんなに変わってないから大丈夫だろ？」

優陽 「あ。しべちゃん、今、酷いこと言った〜！」

調 「あはは」

滯音と調は、ほんの少しだけでも優陽の笑顔を取り戻せたことにホッとしていた。

◆海水浴場

自転車を約1時間漕ぎ続け、三人は最寄りの海水浴場へとやって来た。

優陽

「海だーっ！」

自転車を止め、砂浜に第一步を踏み出すその瞬間、両手を広げながら優陽が第一声を叫んだ。

漑音

「あはは。お約束の雄叫びだね」

調

「でも、海を見ると『海だー』って言いたくなる気持ちは分かりみが深い」

優陽

「なんなんだろうね、このワクワク感！」

漑音

「霞ヶ浦とも似て非なるものっていうか、なんか違うんだよね」

調

「霞ヶ浦はホームだし、家族みたいなもんだからな」

優陽

「霞ヶ浦が家族なら、海はなにかな？」

漑音

「おじいちゃん、おばあちゃん家、とか？」

調

「いや、漑音の家におじいちゃんとおばあちゃん、いるだろ？」

漑音 「お父さんのね。お母さんの実家は福島シャードだから、そっちの家に

行った気分？」

優陽 「うん、なんとなくわかるよ！」

調 「ゴメン。私にはちよつと難しい」

優陽 「あはは」

満面の笑顔を浮かべる優陽。

映画を撮り始める前までは当たり前だった表情だ。

優陽 「この辺でいいかな？」

漑音 「そうだね」

調 「それじゃ、せーので行くよ」

三人 「せーの！」「」「」

レンタルで借りてきたパラソルを立てて、三人同時に体重を掛ける。
パラソルは砂浜に埋まって固定され、傘を開くと砂浜に陰をつくり出

した。

三人はギラギラと照らす日差しから陰の中に避難すると、そこにレジャーシートを敷いた。

そして風で飛ばされないようにそれぞれの荷物をレジャーシートの上に置くと、三人は顔を見合わせて一斉にTシャツを脱いだ。

優陽 「わあ！ しべちゃんの水着、ちょー大人っ！」

滯音 「それが噂のおニューかぁ。っていうか、しべ、大胆！」

優陽 「いいな、しべちゃん、スタイル良いからさ」

調 「うっ……あんまりイジるなよ……恥ずかしいから」

滯音 「へえ、しべでも恥ずかしいことってあるの？ こりゃ、珍しいわ！」

調 「お、おいっ、滯音っ！ なんてカメラ持ってきてるんだよ！ 撮る

な！」



調は滯音が持っているカメラを奪い取ろうと手を伸ばすが、運動神経抜群の滯音は軽く避ける。

その後も滯音を追い続けるが、滯音の身は軽く、調の攻撃を寄せ付けなかった。

優陽 「おおーっ！ しべちゃん、凄いよっ！ 色々と！」

調 「変な目でみるな、優陽ーっ！」

滯音 「あははー！」

三人のかشましい姿も、夏の海では緩和されてしまう。

右を見ても左を見てもはしゃいでいる人達だらけ。

日焼けするために寝そべっている人達も含めて、誰もやかましいと文句言う人などいなかった。

優陽 「ねっ、スイカ割りしよ！」

漑音 「スイカなんて持ってきてないよ」

調 「メロンならあるけどな。お母さんに持って行きなさいって言われてさ」

優陽 「おー！ さすが！」

漑音 「しべの家、メロン農家だもんね」

調 「ああ。ウチのメロンは旨いぞ」

優陽 「それじゃ、メロン割りやろ！」

漑音 「いや、普通にダメでしょ。スイカみたいに綺麗に割れないし、勿体ないし」

優陽 「そうだね、えへへ」

調 「それじゃ、切るぞ」

調は荷物の中から果物ナイフを取り出し、メロンを四等分に切った。

調 「はい」

優陽 「えっ？」

四等分にしたメロンの半分、つまり二きれ分を優陽に渡す調。

調

「優陽、頑張ってるからな。ご褒美だ」

優陽

「いいの？」

湊音

「異議なし」

優陽

「ありがとうっ！」

優陽は遠慮無く受け取ると、ゴミ袋代わりのコンビニ袋の中に種を捨ててる。

優陽

「あーむ！」

一切れ目のメロンに向かって大口を開け、スイカのようにかぶりつく優陽。

調 「おいおい。スプーンも持ってきたから使えって」

優陽 「むぐむぐ……ぷはあっ！ おいしー！」

漣音 「うん、凄く甘い！」

調 「メロンは茨城シャードの名産品だからな。特にウチのメロンはひいき目なしに最高だ」

優陽 「またお母さんと買いに行くね！」

調 「ああ。優陽の家はお得意さんだからな。いつも通りオマケするぞ！」

漣音 「わたしもまた買いに行くよ！ このメロンは泰介との取り引き材料になるからね！」

調 「なんだかんだ言っても、漣音姉弟は仲いいよな」

優陽 「だよー」

漣音 「やめてよー！ それだけはないから！」

優陽 「あはは！」

三人は久しぶりに心の底から楽しんでいた。

満面の笑みを浮かべる優陽を見て、漑音と調は連れてきて良かったと視線で合図し合った。

やがてお昼になり、三人は海の家で食べ物を購入し、パラソルに戻って来た。

優陽 「焼きそばおいしー!」

漑音 「たこ焼きもおいしいよ」

優陽 「一口食べていい?」

漑音 「うん、いいよ。わたしも焼きそば一口ちょうだい」

優陽 「うん!」

優陽と漑音は焼きそばとたこ焼きを持つ手を互いに差し出し、そして同時に箸を伸ばした。

優陽

「むぐむぐ……う……ん！ ホントだ！ たこ焼きおいしー！ しべちゃんのかき氷もいい？」

調

「いいよ。お食べ」

調は先にプラスチックのスプーンを渡し、その後でかき氷を差し出した。優陽は上部のシロップがたっぷり掛かった部分を一掬いし、口へと運ぶ。

優陽

「ん……！ キーンってきたー！」

調

「一口が大きいんだよ、優陽。そりゃ、くるって」

しかし、頭の痛みが取れると、突然素に戻ったかのように優陽の笑顔が薄くなった。

そして、左右に並んでいる滯音と調の顔を順番に見渡すと、改まって語り出した。

優陽 「ありがとね、漣音ちゃん、しべちゃん」

漣音 「な、なによ、急に」

優陽 「あたしが落ち込んでたから海に誘ってくれたんでしょ？」

漣音 「べ、別にそんなわけじゃ……」

調 「漣音、優陽も私達のことをよくわかってるんだよ。だから誤魔化し

たって仕方ないさ。だろ、優陽？」

優陽 「うん。二人の気持ちはよくわかってるつもり……だから余計に嬉し

いんだよ」

漣音 「優陽……」

優陽は海の色を反射したかのような、真っ青に広がる茨城シャードの空を見上げた。

優陽 「あたしは、東京の高校に進学して、そこでアクトレスになるつもり

だったんだよね」

漣音

「……うん」

調

「ずっと言ってたもんな」

優陽

「でも、アクトレスになれないって知って、どうすればいいのかわからなくなっちゃった」

一瞬、漣音と調の頭の中で、エミッション値を測った時の優陽の表情がフラッシュバックする。

漣音

「……一緒に土浦の高校に行こうよ。わたしはずっとそのつもりだよ？」

優陽

「でも、あたしには漣音ちゃん達が目指している高校は無理だよ。そんなに頭、良くないし」

調

「だから、私達が鍛えるって。優陽の頑張り次第で、絶対に同じ高校に行けるから」

調は拳を握り、顔を優陽に近づけ、目をジッと見つめた。

調

「いいか、絶対に、だ。優陽さえその気になれば、絶対に受かるから。断言する」

優陽

「……しべちゃんが言うのと、凄く説得力があるよね」

滯音

「わたしじゃ、説得力ないんかい！」

滯音も少し怒った表情で顔をグッと近づけてきた。

優陽

「あはは……」

優陽は苦笑いを浮かべた。

すると、少しだけその場の緊張感が解れた。

そして、三人は再び横並びになって、同時に空を見上げた。

漣音 「だけど、絶対だよ！ 優陽もしべも、みんな同じ高校に通うんだから

ね！」

優陽 「……うん。そうだね。みんなで土浦の高校いこー！」

調 「おお！ ようやく優陽がやる気になったよ！」

優陽 「だって、あたしが頑張らないと、二人ともレベル下げちゃいそうだし」

漣音 「そうだよー！ だから頑張らないとダメだからね、優陽！」

優陽 「うん！ 目指せ、土浦！」

優陽はエイエイオーと、右手を空へと突き出した。

そして左右にいる二人を交互に見て、ニコツと笑う。

優陽 「土浦なら、アクトレスの事業所もあるしね！」

漣音・調 「あ……」

優陽としては全く悪気が無かったし、無意識に言ったことだった。しかし、滯音と調にとっては、優陽に氣遣っていたデリケートな話題だったので、敏感に反応してしまう。

調

「……まあ、それは以前にも言ったけど、実際に高校生になってから考えるさ」

優陽

「あ……そ、そんなつもりで言ったんじゃないよ？ ゴメン……」

優陽は反射的に謝った。

だけど、すぐに後悔する。

優陽

（この話題になると、いつも氣をつかわせちゃう……このままじゃ、いつまで経ってもこの話になる度に雰囲気壊しちゃうよね……）

二人の氣遣いに嬉しい反面、心苦しくもある。

いい加減、自分の気持ちにもケリを付けるため、優陽は意を決して二人とこの話題に向き合おうとした。

優陽

「あのね、この前、松井先生に聞かれたんだ。お前は本当にアクトレスが好きなのか、って」

滯音

「え……？」

優陽

「あたし、断言できなくて……だってあたし、子供の時、出会ったアクトレスのお姉さんが……」

優陽が子供の頃のトラウマを二人に話そうとした瞬間だった。

ウ~~~~~！

辺りに警報が鳴り響く。

三人

「『え……！？』」

アナウンス「只今、茨城シャード内にヴァイスが侵入しました。落ち着いて係の誘導に従って下さい」

それまで平和だった砂浜に鳴り響く警報。

それは、話し出そうとしていた子供の頃のトラウマとシンクロしていた。

◆千葉シャード内の遊園地

あの日もヴァイスがシャード内へ侵入し、警報が辺りに鳴り響いていた。

優陽 「うわああああん！ お母さーーん!!」

優陽は両親とはぐれ、迷子になっていた。

泣きながら一人で歩いていると、一人のお姉さんに声を掛けられる。

お姉さん 「大丈夫？ お母さんとはぐれちゃったの？」

高校生くらいの女の子が泣いている優陽の前で膝立ちし、優しく微笑んだ。

優陽 「うう……」

見知らぬお姉さんに声を掛けられた優陽は、相手の表情を伺うように一瞬泣き止むが、それが探している両親でないとわかると再び鳴き始めた。

優陽 「うわあああん！ 怖いーっ！ お母さーーん！」

優陽はまだ小学校に上がったばかりの年齢だった。

誰も知っている人がいない場所で鳴り響く警報に、幼い優陽は泣くことしかできなかった。

お姉さん 「大丈夫、安心して。あたし、アクトレスだから！」

◆海水浴場

漑音 「だ、大丈夫、優陽っ！」

優陽の意識が現代に蘇ると、漑音と調が真剣な表情で覗き込んでいた。

優陽 「え……？ あ……」

優陽の頬を涙が伝っていく。

咄嗟に拭おうとするが、既に涙は砂浜に零れていった。

優陽

（そっか、あたし、泣いてたんだ……）

そこでようやく優陽の意識がハッキリし、辺りをキョロキョロと見渡した。

優陽

「ヴァイスは!？」

調

「大丈夫。警報は解除されたよ」

優陽

「そっか……」

確かに先ほどまで鳴っていたサイレンの気配は既に消えていて、海水浴を楽しんでいた人達は一様に帰り支度を始めていた。

漣音

「……何か考えていたの？　ぼおっとしてたけど」

優陽

「あ、うん……ちよっと、子供の頃のことを思い出して……」

調

「とにかく、今日はこれで海岸は閉鎖らしい。荷物を片付けて帰ろう」

優陽

「う、うん……」

当時の記憶がフラッシュバックした後遺症なのだろうか。

優陽は未だに自分が過去にいるのか現在にいるのか、少し混乱していた。

◆ 帰宅路

調

「さっきはどうしたんだ優陽？」

優陽

「え、なにが？」

自転車を漕いで帰宅している頃には、優陽の意識はハッキリしていた。それだけに、終わった話だと思っていた浜辺での出来事をぶり返され、

優陽は戸惑ってしまふ。

調

「さつき、ずっと遠くを見ていたからさ」

『泣いていた』と直接的には尋ねることはさすがにできなかった。

しかしここ数日続いていたデリケートな展開に、普段であればハッキリと物言う調でも慎重にならざるを得なかった。

滯音

「確か、子供の頃のことを思い出したって言ってたよね？」

滯音も調に乗ってきた。

自分から言い出すことはなかったが、様子がおかしかった優陽のことを気にしていたらしい。

優陽

「あ、うん……」

あの直前、優陽は先日の松井とのことを含めて、全てを二人に話そう
と
思っていた。

しかし、警報によって生まれたフラッシュバックによって、優陽は再
びアクトレスに対する複雑な想いを抱えてしまい、ポジティブに話す
自信を失ってしまっていた。

優陽

「大したことじゃないよ、えへへ」

調

「……そうか」

湊音

「……………」

そこで三人の会話は途絶えてしまった。

◆調の部屋

優陽や滯音がたまに遊びに来ては、部屋が広くて羨ましいと言う。アップライトではあるが、生のピアノが置いてあるせいもある。ただ、確かに同級生の部屋よりは一回り広いのは否定できない。

その部屋でピアノに向かい合う調。

そして感情の赴くまま、鍵盤を叩いた。

調

（明らかに優陽の様子はおかしかった……）

調は幼稚園の先生がピアノを弾く姿に憧れ、自分もピアノをやりたいと両親にお願いした。

すると、家がメロン農家で比較的裕福だったこともあり、二つ返事で受け入れて貰えた。

調

それ以来、毎週火曜日がレッスンの日となったが、それと引き換えにその日は同級生と遊べない日にもなった。

（子供の頃を思い出したって言ってたけど……）

しかし、ピアノは小学校六年生で辞めてしまった。

決して嫌になったわけではなかった。

ピアノよりも興味があるものが生まれてしまったただけだった。

調

（優陽はなんで話してくれなかったんだ……？）

中学生になってから始めた映画作り。

言い出しっぺは優陽だったが、滯音も、そして自分もその面白さに嵌まってしまった。

そして、調のピアノは映画作りに十分に役立つものでもあり、火曜日

の経験が無駄にならなかったことが嬉しくもあった。

調

（優陽にとって、私達の存在はそんなものなのか？）

調は、昔から感情が動いた時の方が演奏も、そして曲作りもクオリティが高くなる傾向があった。

普段がクールな分だけ、感情の動きにセンシティブだったからかもしれない。

調

（なあ……優陽……っ！？）

そして、今までの人生の中で最も感情が動いた今、最高の曲が出来上がった。

【選択】 果たしてその曲調は……？

《A 悲しくて切ない曲》

《B 荒々しくて激情的な曲》